

海老名市立有鹿小学校 学校運営協議会 議事録
(令和7年度 第3回)

- 1 日時 令和8年2月13日(金) 10:00~12:00
- 2 場所 海老名市立有鹿小学校 会議室
- 3 出席委員 鍵渡正徳会長、碓井雅巳委員、池澤誠也委員、越智正則委員
田中由美野委員、伊藤恵美子委員、新井悦子委員
姫野珠実校長、土谷政巳教頭 柴田稜介教諭 宮下翔太教務

4 会議の内容

(1) 開 会

(2) 会長あいさつ

(3) 学校長あいさつ

(4) 議事①「学校評価アンケートの結果について」

姫野校長：児童、保護者、教職員を対象にアンケートを実施した。保護者の回答率は、昨年度と比べると多少落ちたが、それでも良い回答率だと思う。昨年度は、教職員の回答率が低かったので、今年度は教職員にも忘れずに実施するよう声かけをした。結果を総括すると保護者、児童ともにどの項目でも肯定的な回答が多かった。その中でも、肯定的な回答率が少し低かった項目が、保護者の「教職員は相談しやすい雰囲気か」なので、これについては来年度以降の課題としたい。また、全体的に教職員の回答において「当てはまる」という肯定的な回答の割合が低い結果となった。これは、職員が消極的というわけではなく、もう少し高いところを目指しているということだと思っている。また、「すごくできている」と言い切れない職員の謙虚なところが結果に出ている。

土谷教頭：この職業は、どこまでやってもやり足りないものだと思う。それが先ほどの校長の話にもつながると思う。

鍵渡会長：幼稚園でも職員にアンケートを実施しており、小学校と同じような結果になった。やはり、職員としてはいろいろなことに一生懸命取り組んではいるけど、自信をもって「やっている」と、言えない謙虚な部分が幼稚園の職員にもあると思う。

伊藤委員：教職員のアンケートは無記名か。どこまでやってもやり足りないというのは、時間的なことだろうか。

土谷教頭：例えば毎日の日記など、誤字脱字のチェックや一人ひとりにコメントを書くようにするととても時間がかかり、授業準備などほかの業務もあるので、本来やりたいことに時間をかけられないのが現状としてある。

伊藤委員：働き方改革については、職員の人員を増やせば解消されるものなのか。

土谷教頭：難しい問題である。SSS に丸つけをお願いすることもできるが、やはり、子どもたちの提出物などについては、他の人に任せるというよりも担任が自ら確認したい。

池澤委員：こういうアンケートの回答は「否定的なもの」につけにくいと思う。現状について更に把握するためには、アンケートの回答方法も考えなければいけない。

アンケート結果の中で、教職員の「地域とのあいさつ」についての項目の結果がよくないのが気になった。子どもたちの挨拶について、今後の取り組み方について検討してもよいと思った。

鍵渡会長：それぞれの回答についての細かい意見などもあるのか。

姫野校長：自由記述欄はあるが、理由まで記入している先生は少ない。先ほどの池澤委員の「地域のあいさつ」については、先生から見て、子どもたち同士、地域の方への挨拶をしていると感じるかという問いである。

土谷教頭：有鹿の子たちは挨拶をしないわけではない。こちらから挨拶をすればするという感じで、自主的にする子が少ない。

鍵渡会長：毎朝、外で子どもに会うと、挨拶を返してくれる。挨拶を返してくれると気持ちが良いものなので、やはり挨拶は良い人間関係を築くためにも大切なものだと思う。

越智委員：インクルーシブの件で、海老名市が今、力をいれているものだと思う。教職員がこの項目について、自信をもって回答している割合が少ないのが少し残念。謙虚な部分もあると思うが、もう少し自信をもって回答してもよいと感じた。

姫野校長：もう2年間インクルーシブ教育についての取り組みを進めているが、未だ教職員の中でもどこを目指しているかを模索しているところもある。それがアンケート結果の数字にもあらわれていると思う。これまでの取り組みも踏まえて来年度のグランドデザインも少し修正した。これについては後程詳しくお話をさせていただく。

鍵渡会長：「教職員は相談しやすい雰囲気か」という項目は、もう少し肯定的な意見があってもよいと思った。やはり、保護者も自分のお子さんについて心配なことなどは、先生に相談したいと思う。学校から、積極的に保護者へ教職員との相談を勧めたりしたり、声をかけたりしているのか。

姫野校長：懇談会などで、「何かありましたらご連絡ください」と声をかけている。また、電話で話すよりも対面で話をしたほうがよいということもあり、2学期ごろから対面での相談も勧め、要望に応じている。

田中委員：面談をする時は、担任の他に学年の先生などもついて一緒におこなうのか。

姫野校長：相談内容にもよるが、基本的に担任以外の教職員が同席している。

伊藤委員：今は、学校も電話で対応できる時間が限られている。

姫野校長：遅い時間に電話で対応するよりも、日程を調整して、対面で面談をさせていただきたいと考えている。

鍵渡会長：幼稚園でも新年度が始まったら、保護者の心配事を無くすためにも面談を実施している。

碓井委員：「インクルーシブ」のように、今の時代なんでも英語になってしまうのは良くないと思う。もっと日本人として、日本語の文化・伝統を子どもたちに伝えていかなければいけない。何でもその時代の考えに合わせなくてもよい。日本人が持っている根底にあるものを大切にしたい。なんでも英語を入れればよいものではない。最近の言葉にすごく違和感がある。

越智委員：しかし、これを日本語で伝えると、すこし差別的な言葉と、とらえる人もいる。

碓井委員：差別については、今の時代は敏感になりすぎている。インクルーシブという言葉も分かりやすく言えば「思いやり教育」という言葉と同じ。

鍵渡会長：インクルーシブという言葉になると、かなり範囲が広がる。どこまでを対象にするかが分かりにくい。宗教の問題で、行事で歌を歌わない、出席しないということもあるが、今はそれも認めている。それも広くインクルーシブだと思う。

伊藤委員：私たち大人も、外国の文化を受け入れるチャンスと捉えて、勉強していかなければいけない。思いやり教育も昔からやっているが、今は昔に比べて世界が広がったと感じる。

池澤委員：昔の教育の思いやりは、いろいろな違いがある人たちを、何となく一緒にしましようというもの。インクルーシブという言葉で前面に出すことで、宗教やいろいろな違いなどを一度全部表に出して、それぞれの違いを認めつつ、一緒にしましよう、というものが今のインクルーシブだと思う。しかし、今は、言葉は広まってきてはいるが、具体的な行動になった時に何をすればいいかが、まだ咀嚼できていない状況だと思う。

鍵渡会長：アンケート項目に戻るが、学校で「自分のよさを認める」ような活動はしているのか。

柴田委員：お互いの良さを紙に書いて、伝え合う活動はしている。お互いに伝え合うことで、自分の良さを認めることにもつながる。

伊藤委員：「自分のよさを感じられる」というのは、学年によっても結果が違うのか。

姫野校長：高学年になるほど肯定的な回答が低いと思う。しかし、昔と比べて、今の先生たちはすごく子どもたちを褒めている。個人にも全体にも常によさを伝えている。褒めて伸ばすという教育が根づいていると感じている。

田中委員：私が小学生の時は、校長先生から褒められたことなんてない。

鍵渡会長：幼稚園でも同じように取り組んでいる。褒めることで、自信につながる。そして、また一生懸命頑張ろうという自己肯定感を育てるサイクルになっている。

議事②「令和8年度有鹿小学校グランドデザインについて」

～令和8年度 グランドデザインについて説明（めざす子どもの姿）～

碓井委員：すごくいいと思う。「がんばる」という言葉を最近聞かなくなっている。高市首相の「働いて働いて」という言葉ではないが、がんばって、がんばってというのも大切だと思う。

姫野校長：「がんばり」というところでは、先日のバイオリンの講演で「弦を張りすぎると切れてしまう。がんばりすぎるのはよくない」というお話があった。「がんばり」という具体的な部分については、子どもたちにも学年に応じて説明が必要。「たかまり」「がんばり」「おもいやり」については学年目標としてそれぞれサブテーマを決めてもいいと思っている。各学年の色もできる。

伊藤委員：このままだと漠然としているからサブテーマを決めるというのはいいと思う。

鍵渡会長：ただ「がんばり」だと、子どもにプレッシャーをかけることにもつながるが、具体的に目標を立てることでよくなると思う。

池澤委員：子どもにそう感じてもらいたいのであれば、語尾が「る」がいいと思った。人に言われているような「がんばれ」のような言葉にするとよくないと思った。

姫野校長：子どもたちに分かりやすくするためにも、やはりサブテーマが必要。語尾については職員会議で再考したい。ご意見ありがとうございます。

越智委員：各クラスで具体的な目標を立てることが大切である。

姫野校長：学校目標→学年目標→クラス目標というように、筋を通してぶれずに達成を目指していきたい。

～令和8年度 グランドデザインについて説明

（学校経営の方針と具体的な取組～地域・家庭・学校の連携）～

伊藤委員：タブレットの持ち帰りはしているのか。

池澤委員：自分の子どもは持ち帰ってはいはいるが、使い方のきまりがあって、結局家庭でやれることがない。

新井委員：最近は逆に紙で宿題を出す先生が増えてきている。タブレットの良いところは、

漢字の学習をしても書き順をしっかり教えてくれる。

池澤委員：紙の宿題を持ち帰り忘れても、タブレットがあると、そこから印刷できる。
子どもからの「今日は宿題が無いよ」というごまかしは通じない。

土谷教頭：タブレットの良さと弊害はある。教員の働き方改革にもつながるところでいうと、タブレットだと自動で丸付けもしてくれる。

伊藤委員：タブレットでの宿題で、子どもたちの理解度を先生は確認できるのか。

姫野校長：アプリによっては確認できる。

伊藤委員：タブレットに入っている子どもの解答、理解度などは、どこまで先生は理解できるのか。

姫野校長：記述式などの問題がある課題はタブレットでは出していない。計算や漢字など正誤がはっきりするものがメインとなっている。

新井委員：タブレット学習が広まった弊害として、子どもたちが国語に苦手意識をもつ子が増えてきていると思う。本を読む習慣がなくなってきている。

姫野校長：グランドデザインに基き、有鹿小学校の特色ある事業として鼓笛、インクルーシブ教育、校内研究・研修についての3つを申請することについて、ご承認いただきたい。

池澤委員：スマイルプロジェクトのように校内だけの取り組みではなく、PTCや他団体との連携など、地域とのつながりについても今後検討してほしい。

5 その他

- ・令和8、9年度有鹿小学校学校運営委員の推薦

6 事務連絡

- ・令和8年度学校運営協議会の開催予定日

7 閉会